

## 日本語Ⅰ・日本語Ⅱ

薄井 良子（関西学院大学日本語教育センター）

佐々木 良造（関西学院大学日本語教育センター）

### 1. 概要

日本語Ⅰは学部1年次留学生を対象とした春学期開講の日本語科目、日本語Ⅱは秋学期開講の科目で、ともに週2コマが充てられている。本科目の目的は、大学におけるアカデミックな活動において必要な日本語能力、およびコミュニケーション能力を習得することである。1コマが「書く・読む」を中心とし、もう1コマが「話す・聞く」を中心とした授業である。原則として1クラス15名以内で能力別にクラスを編成している。日本語Ⅰは開講時のプレースメントテストの結果をもとに、日本語Ⅱは日本語Ⅰの期末試験の結果をもとにクラスを編成している。カリキュラムは全クラス共通である。2013年度は春学期・秋学期共に5クラス編成であった。学部留学生は、年度によって異なるが、中国人留学生が約8割を占め、韓国人留学生が約1割、少数ながらインドネシア、マレーシア、ミャンマー、フィンランドなどの留学生が在籍している。

### 2. 2013年度の到達目標と授業内容

日本語Ⅰ・日本語Ⅱとも、「書く・読む」は薄井が担当し、「話す・聞く」は佐々木が担当した。

日本語Ⅰ「書く・読む」では、論説文を正確に読み解くこと、論文、レポートに必要な表現を身につけること、論説文を簡潔・的確にまとめた要約文が書けるようになること、説得力のある意見文が書けるようになることを目標とした。授業では、読解過程や作成した要約文や意見文のフィードバックにおいて、学生相互のグループ活動を行った。

「話す・聞く」では、短い新聞記事を読み内容を理解することから始め、その内容を口頭で説明すること、説明の際に聞き手に配慮したメタ言語を用いることができるようになることを目標とした。これに加えて、クラスメイトと協力して学習を進める態度の涵養に努めた。

日本語Ⅱ「書く・読む」では、レポートの構成を身につけることを到達目標にし、「日本の教育格差」をテーマとして3000字の問題解決型のレポートを執筆した。執筆過程で個別に教員からの丹念なフィードバックを受け、また最終レポート提出前に、レポートの内容についてクラス内で各自が口頭発表を行った。「話す・聞く」では、自分と異なる意見を持つ人と円滑に意見が交換できること、資料に基づいた意見が言えるようになること、適切な資料が選別できるようになることを目標とした。日本語Ⅰに引き続き、

クラスメイトと協力して学習を進める態度の涵養に努めた。また、学部2年次春学期の授業で取り組む活動であるディベートを視野に入れ、意見内容の論理性を客観的に把握するために「十字モデル」を取り入れた。

### 3. 2013年度の成果と2014年度の課題

#### 3.1 2013年度の成果

日本語Ⅰ「書く・読む」は2012年度の日本語Ⅱで実施した「論文・レポートに必要な表現」を前倒しにして、春学期に学部のレポート執筆時の参考になるようにした。「話す・聞く」は、2012年度の口頭発表課題（朝日新聞『ひと』の紹介）にメタ言語の指導を加えた。さらに、他者と協力することを学ぶ機会として『ひと』紹介のポスターセッションを企画し相互評価を行った。

日本語Ⅱ「書く・読む」は、構成を明確にするという観点からアウトラインを見直す過程を1回増やした。また、教員から受けるレポートの内容に関するフィードバックの回数を2012年度の3回から5回にし、学生のレポート執筆にかかわる不安を緩和した。

「話す・聞く」は、資料収集と話し合いの活動を計7回行った。話し合いの振り返りから、受講生は「適切な資料に裏付けられた意見の重要性と他者の意見への傾聴」、「聞き手の心情に配慮した話し方」、「話し合いに関する評価」、「賛成・反対に固執しない態度」、「話し合いによる自身・他者の変化」に気付いていることがわかった。

#### 3.2 2014年度の課題

日本語Ⅰ「書く・読む」では、学生のグループ活動がより効果的に進むように、教員の働きかけについて教師間でのさらなる検討が必要である。「話す・聞く」では、一方的な発表に終始する傾向がみられた。双方向のコミュニケーションが図れるよう、授業内容を工夫したい。

日本語Ⅱ「書く・読む」では、提出物や最終レポートにおいて、剽窃が見られた。剽窃をしない引用の仕方を確実に習得する練習を設ける必要がある。「話す・聞く」では、「十字モデル」の利点をいかして、意見の論理的整合性を考えて話すことができなかった。ほかにも、話し合いの進め方、参加者の役割、タイムマネジメントなど話し合うための準備にも目を向けなければならない。また、話し合いの授業における教師の役割も検討する余地がある。

### 4. 今後に向けて

学生に一貫した指導をするためには、日本語Ⅰ・Ⅱと日本語Ⅲ・Ⅳのカリキュラムを見直し、到達目標について科目間の連携を図ることが必要である。